

ので刺すと、音は大分減せられます、兩方刺し破ると斷然止まつてしまつて、全く音が聞えない様になつたとのことです。

此鳥は其交尾期の間、耳房や頸の羽を逆立て、頭の上の毛冠をかくしてしまふといふことです。此圖の頭の上に角の様に突立つてゐる羽は即ちこれです。

また此鳥の雌の袋は雄と同じ様に頸の兩側にあります、余程小さいです、其上に此袋には雄の袋の様に膨れるといふ力が少しもありません。

行水の

すて所なし

虫の聲



史傳

處女のカザリナ

薫風



ビーター大帝の配としてのカザリナは、史多く傳ふ。ビーター二世としてのカザリナ、亦世之を説くもの多し。予今、試に其の雌伏の小史を探らんとす。

カザリナ、アレキスチーナは、リボニアの一小邑、ダーバットの近傍に生れ、兩親よりの遺産として、唯身一つのみなりき。父死してのち、カザリナは、年老いたる母と共に藪屋の内に人と爲り、不自由勝の生活にも、別に人をも羨まず。他

意なく其の日を過しつゝ、浮世の波の外に立ちて
 世人の注視に漏れつゝも、已が手藝に唯一人、今
 は餘生も長からず、何のたつきもなき母を、もり
 かしづきて暮せりき。

カザリナ曉に起き出で、朝に紡績の事に従へ
 ば、老婦は、其の側に座してバイブルを誦し。暮
 靄林に横はりて、日晝げば、一日の勞役は此に終
 りを告げて、爐火の側に質素なる夕餐の食卓に、
 母子共に、樂の笑を浮べぬ。彼女の日常は是の如
 く單純なりき。而して其の姿容と人格とに至りて
 は、誠に人の摸範たるべきものあり。其の愼密な
 る注意は、轉た、思量の遠大なるを推せしめぬ。
 母は彼の女に讀書を教へ、老教師は常に、格言と
 宗教上の義務を説て、之を訓陶したり。而も、天
 の彼女に附與せる所以のものは、唯其の未來の運

命のみならず、堅固なる思想と、正しき才能は、
 自から備はれりしかば、眞個完全なる女子として
 結婚の申込は、多くの村人より提起せられしが、
 老母をして、獨り淋しく暮さしむるは、其の恐び
 ざる所なりしかば、之等の提言は、皆空しく斥け
 らるゝのみりき。

カザリナの母を失ひしは、其の十五歳の時に在
 り。未だ浮世の波風を知らぬ身の、獨り淋しき、
 藁屋の裡に取り殘されたる事なれば、彼女は竟に
 其の幼少の頃より、訓陶の化に浴したる、老教師
 の許に行き、其處に、其の小供の教師の資格を以
 て、身を寄せしが、其の活氣ある性格と、正しき
 節制は、何日しか小供を心服せしめ、益教師の信
 用を固うしたり。

老教師は、全く家族の一員の如く、自身の小供

の如くに之を取扱ひ、其の家族と共に、師に付て
音曲舞蹈をも學ばしめたりしか、時運旋轉、老牧
師亦贅を易ふるに至り、カザリナは、再び、世に
寄る邊なき、憐の身の上となりぬ。

是時に當り、リボニヤ地方は、戦争の爲に荒涼
を極め、世は血醒さ風荒みて、田野荒廢、餓卒四境
に横はるの光景なりしかば、カザリナ、假令、貧
苦に付ては無上の辛酸を嘗め幾多失意の域に入
せりしとは云へ、時も時、機も機とて、頼む木の
下、幹折れて、貯蓄は日々に幽かになりゆき、自
己の僅かばかりの貯さへ、最早遣ひ盡せしかば、
今は此の地に永居すべくもあらず。遂に意を決し
富裕望を層すべき地として、マリエンポーを指し
て、旅立つこととなりぬ。

手許に残る些少の衣服は、小さな包みに行李を

調へ、僅かの路用を工面して、思慮なくも唯獨り
足に任せて立ち出てしか、由來嶮峻、土瘠せて、
見るからしるさわはれの地なるに、端露の人等の
抄掠に、一入物の淋しさを、増しぬる内を、誰を
たよりとする當もなく、旅の疲れと、道の危険に
飢も忘れて彷徨ひしことも幾度、昨日と暮し、今
日と明し、誰慰むるものもなく、曉に衣袂を路の
邊の草の露に活し、夕に淋しき月を負ふて、知ら
ぬ宿りの風の音に、夢を驚かし、迎れる道も幾日
夜、或誰そ彼の鐘暮れて、夕月かげも薄き頃、杖
を力に立ち寄りしは、路の側の一ツ舎にて、今宵
の宿と頼めるにあはれ、虎の尾を踏みて、身は瑞
典の二軍人の手に落ちぬ。若し此の際、年少下級
一士官の來る微りせば、如何なる凌辱を蒙りしや
も知るべからざりしを、足音に驚きて、暴漢等の

逃遁するや、カザリナ先づ仰で其の人を見るに、感謝辭なくして、驚愕先づ大なり。思はざりき、之れ其の訓陶の師にして、恩人たり、友人たりし老牧師の男ならんとは。

此の會見は實に、カザリナの幸運なりき。長途の旅に、僅かの貯へも全く盡き果て、身の廻りさへ、襪纒となりぬるを、仁慈なる同郷人は、先づ家に伴ひて、衣装を調へしめ、書を以て父の親友マリエンポアの監督、グラツクに彼の女を推舉し馬を與へて、程に上らしめぬ。

カザリナのマリエンポアに至るや。直ちに長官の家に寓し、其の二女の教師となる。芳紀時に十六、而も其の徳と禮節とは、能く訓育の化をなしぬ。而して其の才色は、到底埋もれ了るものにあらず。伉儷を得んとするもの頻りに至る、然れど

も、獨り潛に決する所あり、其人、假令一腕を失ひ、軍務の爲に不具となりしも、其の恩に浴するや誠に深きものあれば、以て已れの終世を托し、因て他の請を拒かんとし。偶々事によりて邑に來るや、直ちに意中を彼の士官に語るに、情意亦相合するものあり、此に於て、交歡の式は遂に擧られたり。

幸か不幸か。好歡夕を終ふるに由なく、鴛鴦の杯は又訣別の悲を含み、露軍長驅、マリエンポアを圍み、不幸なる士官は、席上より隊へ呼び還されぬ、綿々たる恨之より長へに、彼の士の影は竟に再び見るべからざるなり。

筒の音、喊の聲、硝煙日暗く、悲風夜々枕頭に腥を傳ふ。叫喚號哭、世は修羅の苦に在り。マリエンポアの圍幾日、無辜の民、無垢の處女、虎の

如く狼の如き、北國二軍の爲に、其の運命を犠牲とせらるゝもの幾許、城竟に陥りぬ。潮の如く攻め入る敵軍、苟も住民と云へは、男女を問はず老幼を論せず、劍光閃く所、腥風生じ、四境の風物、盡く血を以て飾られ、戦後幾閱日、月光獨り青し。

カザリナ、幸に囊中に潛み、其の禍を免れしか。遂に又、憐れなる境遇に立たざるべからざるなり。是に於てか、其の運命に任せて、身を處せんとし婢僕の事に従ひしか、謙讓信神、以て己を持し、と雖とも、其の天真の瀟洒たるものは、自から失はざりき。而して其の有徳と従順の風評は、遂に露の將軍なる皇子メンジコッフを動かすに至りぬ。是に於て、皇子遂に主人の士官に請ひ、カザリナを其の官邸に容れて、姉妹の許に在らしむ、而

して其の楚々たる風采は、日に光彩を生じ、ピーター大帝の一顧、リボニヤの農家の女、忽ち雲臺を攀ちて、ザアの國に万民の儀表と仰かるゝに至りぬ。(完)

靡き得て

國の寶となるものは

ひとのこゝろの

玉にぞありける

月 照